

日神 夕なり : 文苑

著者	零雨
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 1 7
ページ	4 3 - 4 5
発行年	1906
URL	http://hdl.handle.net/2298/5978

ゆられゆるるゝゆめやすく
はなちるもりのはかばまで

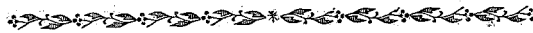
日神

零

雨

夜もすがらに寝も寐す、
『時』は朕を守り、煌らかに、
散亂ふ星の絺繡、
羞明き月をぞ隔てたる。
『時』の生母、『曙』の、
『月』なむ沈む、夢も』と、
聲調はがらに宜りければ、
暫しも止まぬ夢路をば、
霞む晴ゆ搔消しぬ。

夜御殿を徐々と、
茜大被は滄海の
波の穂に置き、登るや



あまつ穹空、道すがら、
かぎろふ火もて紫の
雲の門左右に排きつ。

茲に虚空は赫やける
朕にこそ充て。青の地は
小夜の氣ゆ、朕に懷かれぬ。

日光は征箭と。夜を愛で
ひな加畏懼る『欺蹠』

重傷になやみ俯伏し、

『悪行』『邪念』のともがらは
しとと飛び来る箭にたへで

深くも避きぬ真闇に。

眞正の人草新たしき

力の榮や。——『夜』は西の

奥區にこそ籠りしか。

豊旗雲の赫耀、

煌らに艶ふ虹の輪、
 さては野もせの花草、
 皆がら育て。百敷の
 常世の宮の雛星や、
 拷を装ひて天路を
 門渡るさくら愛男を
 美しくも飾り。天地の
 點火はなべて朕ぞとます。

亭午は天の頂上。
 さて後、ゆるに朱華の
 衣くはしき雲間に、
 本意ならなくに、下り行く。
 あはれ、地のへの愛兒等は
 悲び哭つ。——離別や。
 黄金に照りの山の端ゆ、
 慰籍の微笑、こよなくて
 歡びわたる。——平和や。

朕は宇宙の靈妙を
 回顧してぞ知る眼よ。
 嚴の御苑に憧憬
 高き、管絃、はた歌謡の
 調和する、樂の音も、
 豫言するも、癒すも、
 藝術の國や常世邊の
 美まし光明も、——なべて朕よ。
 愛で讃へむは汝等に。

(P.B.Shelley.)

夕なり

夕なり。
 黄金に映の高御座、
 天照らす日の嚴くしも。
 世は静寂の夕間に、
 入るらむ時か。平和の樂。

清らる。

夏野の媛は翡翠の

美しき被衣をなよやかに、

蟬の音たへし緑沼の

水際ちかく徐と出でましぬ。

羞しや。

沼領る男神、一向に

姫こそ見つれ。静ごころ、

あゝ、戦戦と。十寸鏡

男神の面は青み顫ひぬ。

雲がくれ

古

梅

海はるかなるしのゝめ空に
いつる光のみすがたまちて
ぬか伏す雲にやすらひをれば

島山影のうつと浮び

白鳥一羽また醒めたりな

斜めに西へうすれてゆくよ

あこがれ人の夢の影かや、

朝風たちてひらめく雲の

裳よ袖よ高根の額よ

金色たびつ遠近里の

樓守の鐘の讚美の調と

空にながるゝ朝の榮かな、

詩のまばろしうつゝに見初め

わかき血潮のかをるにまかせ

空ゆく雲に天翔けるとき

見えろす里にうす紫の

影の落ちては人なづかしき、

そもいかなれば尊き影を

追ひゆく想ひ世には離るゝ

あはれ永久人の子なるを
むくろに返へる詩の魂